

ネパールに安全な飲料水を 山梨大研究者ら支援へ

装置活用や技術指導…5年計画



カトマンズで井戸を調査する風間ふたば教授（中央）＝風間教授提供

慢性的な水不足に悩むネパールの首都カトマンズで、住民が安心して飲める水を十分に供給できるよ

う、山梨大の研究者らが支援に乗り出す。水の分析から処理まで多彩な専門家が在籍する山梨大の特徴を生

かし、今年度から5年計画で取り組む。

カトマンズは盆地であり、主に地下水を水源としている。水道だけでは水の供給が足りず、約200万人の住民の多くは井戸水を利用している。しかし、下水の近くの井戸では水が大腸菌に汚染されているなど、飲用に適さない水を飲んでいる人も少なくないという。

そこで、山梨大の研究者ら約20人でつくるチームが支援を手がけることになった。まとめ役を務める風間ふたば教授は水質分析が専門で、カトマンズの地下水調査を10年ほど前から続け

てきた。6月にも研究チームが現地に赴き、ネパール政府や大学関係者と共同で作業に入る。

カトマンズで地域ごとの水の需要や地下水の水量、水質などを調べ、地図にまとめた「水質安全マップ」をつくる。この地図をもとに、どんな処理装置をどこに設ければ、安全な飲料水を効率よく供給できるか検討する。

カトマンズは電力不足も深刻で、日本で使われているような浄水設備の利用は難しい。砂やスポンジで濾過する簡便な装置の活用が中心になる見通しだ。ネパールの研究者を日本に招き、技術指導もする。

予算は5年間で約4億円。科学技術振興機構（JST）と国際協力機構（JICA）による、途上国と共同研究しながら課題の解決に結びつける支援プログラムを利用する。

風間教授は「山梨大には国際流域環境研究センターがあり、水問題の各分野の

研究者がバランスよくそろっている。ネパールの人たちが将来、自力で水供給の計画作成や設備の建設ができるように、基盤づくりのお手伝いをしたい」と話している。
（谷口哲雄）